
彼の彼女

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の彼女

【Nコード】

N25300

【作者名】

日向葵

【あらすじ】

彼と最初に話したのは、彼の大好きな“彼女”の話。

“彼女”のことを嬉しそうに話す彼にいつしか私は惹かれていって…。

ちょっと切なくて、ちょっとほんわかするお話を目指しました。

「今日も彼女元気？」

「おう！もう超々元気！」

これがタケと私の一日の始まりの挨拶。

タケと初めて話したのは、つい最近。

部活の帰りに忘れ物をして教室に取りに戻ったら、タケが一人で教室にいた。

タケは小柄だけれど、金髪、ピアスの出で立ちで、目立つ男の子だったから、

万年美化委員の地味な女子高生の私なんかと話す機会なんてもちろんなく、

私はそそくさと目的の荷物をとりに、教室へ入った。

そう話すつもりなんて、これっぽっちもなかったんだけれど。うっかり見てしまったんだ。

彼が“泣いている”のを。

「どっしたの？」

気づいたら、思わず声をかけていた。

そのときのタケの顔は忘れられない。

教室は夕暮れのオレンジ色の太陽が染め上げ、

タケの驚いた横顔を茜色に照らしていた。

なんだか、その顔がとてもきれいだなんて、思っちゃったんだよね。

そうしたら、しばらくしてタケが長いまつげに涙をしたためながら、ぽつつと呟いた。

「俺の“彼女”いなくなっちゃったんだ。」

気づけば、タケの“彼女”の話を聞いていた。

タケの話によると“彼女”は、スタイルがよくて、綺麗で、頭もいいらしい。

とっても相性が良くて、本当に大事に可愛がっていたのに、ある日目を離れた隙にいなくなっちゃってしまったらしい。

「警察にいったほうがいいんじゃない？」

そうアドバイスすると、タケは鼻をすすりながら首をふった。

「行ったけど、全然手がかりがないんだ。」

「誘拐？」

「やめてよ！縁起でもないっ！！」

タケはそういうと、聞きたくないというように耳に両手をあてて下を向いた。

どうやら事は深刻なようだ。

あーでもないこうでもないと話しているうちに、すっかり日も落ち、あたりは真っ暗になっていた。

「そろそろ帰らないと。」

「ほんとだね。すっかり遅くなっちゃったよ。」

すっかり泣きやんだタケは少し疲れた表情で、それでも少しだけ笑って、送って行くよといった。

私は初めて男の子におくってもらって、誰かに見られやしないかとひやひやしたけれど、ちょっとだけドキドキした。

結局、タケの彼女は次の日見つかった。

朝一番に、嬉しそうな顔でタケが報告してきたのだ。

それから、彼女の様子を聞くのが毎朝の私の日課になってしまった。彼女の話をする嬉しそうなタケの顔が、どうしてだか見たくてしようがないからだ。

彼の笑顔をみると私まで嬉しくなってしまう。

「今度彼女に会わせてね！」

そういうと、タケはもちろんだよと、笑って約束してくれた。

その顔を見て、ちょっとだけタケの彼女が羨ましくなった。

それから徐々にだけれど、

彼女の話をする笑顔のタケを見ると、嬉しさ反面どこか胸がうずくようになった。

何故だろうとずっと考えていたけれど、答えはわからなくて、そのうちタケとも何を話せばいいのかわからなくなった。

少しずつ無口になっていく私を、タケが少し不思議そうにしてたのは気付いていたけれど、

自分じゃどうしようもなく、こんな自分がすごく嫌だった。

そんなある日、タケが今度の休みに遊びに行こうと誘ってきた。

なんだか徐々に嬉しくなって、私はうんと頷いた。

休みの日にタケと会うのは初めてだったから、ちょっとそわそわし

ながら待ち合わせの場所につく。

しばらくすると、タケが向こうからやってきた。

履きならした細身のジーパンに、赤チエックのネルシャツ。

うん、悪くない。

「待った？」

「ううん。そうでもない。」

ちよっとだけ気恥ずかしくて俯きながらそう言つと、タケは目を細めてほほ笑んだ。

「じゃあ、いこっか？」

「どこに行くの？」

「うん、ちよっと。向こうに“彼女”待たせてるから。」

「え？」

タケの言葉に、思わず固まった。

「彼女？彼女きてるの？」

急に足をとめた私に、タケはきよとんとした顔で振り返る。

「そっだよ？」

「私、そんなこと聞いてない！」

思わず大声を出すと、戸惑ったようにタケは言った。

「どうしたの？彼女に会いたいって言ったのは、君じゃんか。」

「だって…。」

言いかけた言葉は、声にならなかった。

馬鹿みたいだ。

一人で浮かれて、張り切って、そわそわして。
目頭がかあつと熱くなる。

「私、帰るね。」

やっとそれだけ言つて背を向けると、タケが私の手首を捕まえた。

「待って。何か気に障ることした？」

心配そうに気遣う声が疎ましくて、その手を思わず振り払う。

「彼女なんて会いたくない！！！」

気づいたら我慢できなくて、叫んでしまっていた。

そして、走って逃げた。

悲しそうな顔をしたタケの顔が最後に見えて、ちょっと心が痛んだ
が、

振り返ることはできなかった。

認めてしまったら気持ち膨れてしまって、もう抑えられそうにな
かったから。

自分がタケのことが好きなんだって。

家に帰って、着替えもせず、ベットにうつ伏せて、思いつきり泣い
た。

泣いて泣いて泣き疲れて寝てしまったようで、

気が付いたらもう夕方になっていて、母親が友達がきていると呼び
に来た。

泣き腫らした顔を隠すことも忘れて、玄関に行くと、そこにいたの
はタケだった。

「ごめんね。」

開口一番に彼がいった言葉は、謝罪の言葉だった。

あれからいろいろ考えたけれど、私が怒っている理由がまったくわからないこと。

最近、私が塞いでいるように見えて、心配していたこと。

自分がもし傷つけるようなことをしていたのなら、許してほしいということ。

タケは、ひとつひとつゆっくりと丁寧に彼の気持ちを話してくれた。そして、最後に言った。

「“彼女”がそこにいるから、どうしても君に会ってほしいんだ。」

覚悟を決めて初めて会った“彼女”は、とても予想以上に綺麗だった。

スツキリとした緩やかなラインに、磨きこまれた光る白いボディ。まぎれもなく美人で、スタイルの良い、それはまるで機械のような完璧な美しさ、いやまぎれもなく“彼女”は機械だった。

「か、彼女ってこれのことだったの？」

驚いて尋ねると、タケは少し恥ずかしそうに口をとがらしていった。

「そうだよ。僕の自慢の“彼女”さ。」

夕日に染まり、白い車体を淡くオレンジ色に染めた彼女は、美しいフォルムの“バイク”だった。

「乗り心地も最高なんだよ！」
そう言うと、タケはヘルメットを私に渡した。

「大丈夫？」

「女の子は初めて乗せるけど、大丈夫さ！」

自信たっぷりにウィンクをするタケに促されて、おそろおそろ“彼女”にまたがる。

タケは振り向いて私の様子を確認すると、エンジンをかけた。

「しっかりつかまってね！」

言われなくても、つかまっていけないと振り落とされそうだった。

タケのお腹に回した手にぎゅっと力を入れると、タケの背中がちょっとだけ強張った。

「ご、ごめん。力いれすぎた？」

慌ててあやまると、タケはこちらに振り向いて少し笑った。

「うっん。ちょっといいなと思っただけ。」

「何が？」

「さて、なんででしょう？」

そして意地悪く笑うと、前を向いて大声をあげた。

「それじゃあ、行くよー!!」

「えー!!うわ!!」

風を切って走る“彼女”はタケの言うとおり最高で、

“彼女”に乗って走るタケもすごく楽しそうだから、まだまあ勝てそうにもないやと思ったけど、

いつか勝ってやると心に誓いながら、私は3人デートを楽しんだ。

(後書き)

バイクにほれ込む男の子が書きたくて、出来たお話です。
ちよこつとだけでも、ほんわかして頂けたのなら幸いです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2530o/>

彼の彼女

2010年10月11日15時33分発行